

## 橋の文化誌

### 一九重“夢”大吊橋来訪客100万人突破に寄せて一

下山 邦男

A cultural story of the bridge  
In commemoration of visitors to the Kokonoe  
“Yume”Otsuribashi exceeding 1 million.

Kunio SHIMOYAMA

大分県玖珠郡九重町鳴子川溪谷に2006年10月開通した「九重“夢”大吊橋」の入場者が2007年4月10日で100万人を突破した。橋というものは、本来、人や物が川や谷などを乗り越える為の構造物であるが、この大吊橋は、乗り越えてゆくという目的を持たないユニークな橋である。この橋の入場者（渡橋者ではない）は、通行料金500円を支払い西側の主入口から北側へ渡り、又元の西側へ戻って来る。入場者は、渡橋の間、左右に広がる溪谷の景観や震動の滝の遠景、さらに橋の揺れ（吊橋独特の）を楽しむわけである。

この九重“夢”大吊橋を、観光学の観点から分類すれば「観光対象」と定義できる。今なぜ、数ある観光対象（観光資源を含む）の中で、この大吊橋がこれほど人気なのか。ここで、「橋」というものを総合的に俯瞰し、その建設に賭けた思いや願いについて考察してみたい。

#### [橋の語源]

人は、昔から洋の東西を問わず様々な橋を架けてきた。「橋」という言葉の語源を探ってみると、大言海によれば「彼岸ト此岸トノ間（ハシ）ニ架セルヨリ云フ」とあり、広辞苑によれ

ば、間（ハシ）を端（ハシ）の転義のように解している。国語語源辞典によれば、ハシ（橋）の語源は、朝鮮語の hoatchin（渡る、済る）にあるだろうとのこと。また、このハシにラを接尾したのがハシラ（柱）とみるべきで、柱は地上と建築物の軒または天井との間をつなぎわたすものである、とも述べている。さらに、キザハシを通じて橋渡しとなるもの、媒介物という原義が想定される、ともある。ハシ（かけはし、はしご）は弥生式遺跡の出土品からみると、1.5メートルほどの幅の狭い厚板の表面に、棧状の足かけを4段だしたものが多いが、これは上端を高床の建物の出入口にはめこむようにつけたものと推定されている、とも解説している。推定ではあるが、トルコ語の basamak（渡る、階段）がハシ（橋）とハシ（階、梯）になったという説や、チャム語の ya'pasit（道路の意）がヤハセ（八橋など）の語源であるとの説もある。珍しいところでは、ヘブル語の ASIS（支柱、基礎）に定冠詞の H を冠した HASIS が、ハシ（橋、梯、階）であるという説がある。

日本国語大辞典によれば、橋とは、①主として水流や谷に、また他の交通路の上に架設して、通路などとするもの、②殿舎をつなぐ橋状の渡殿。橋廊、③宮中の清涼殿から紫宸殿に通

ずる渡り廊下。長橋，④能の舞台と楽屋をつなぐ通路。橋掛り，⑤両者の間に立ってなかだちをすること。仲介，⑥はし(階)のあて字とある。

### [橋の起源]

はっきりしたことはわからないが，最初は，偶然に谷間や溪谷を跨いだ倒木や石のような自然の造形による橋だったと考えられている。その後，切り倒した木を利用した，丸木橋，蔓を編んだ蔓(かずら)橋などが造られたと推定されている。徳島県を東西に貫流する大河吉野川の源流，祖谷溪に架かる「祖谷のかずら橋」などはこの典型である。古代の橋といえば，紀元前5世紀頃にバビロニアや中国で架けられた石橋，紀元前4000年頃のメソポタミア文明の石造アーチ橋，珍しいところでは紀元前2200年頃ユーフラテス川に架けられたレンガ橋などがある。

### [橋の種類]

橋を大別すれば，①構造別，②材料別，③機能別に分けられる。

#### ①構造別(図版I参照)

##### 〈桁橋〉

要するに，一般的な構造の橋で，両端の橋台の上に板状の桁が載っているものである。

##### 〈トラス橋〉

両端の橋台の上に，三角形を組み合わせたような部材が乗っているもので，列車の鉄橋などによく見られる形状である。

##### 〈アーチ橋〉

上向きのアーチが特徴の橋で，大分県内では，竹田市などでよく見かける石橋がある。

##### 〈ラーメン橋〉

桁橋を，両方の橋台の脇から斜め上方に，かすがいが組んである構造で，ドイツ語の‘Rahmen’(枠，額縁の意味)がその由来である。

##### 〈斜張橋〉

1本以上の塔から，ケーブルによって橋桁

をささえる構造である。(パリのセーヌ川に架かるノルマンディー橋は，世界最長級の斜張橋)

##### 〈吊り橋〉

両端の塔から，ケーブルを渡し，それによって桁や底板を支える方式の橋である。わが国の明石海峡大橋は世界最長の吊り橋である。

#### ②材料別

鋼橋，コンクリート橋，木橋，石橋，複合橋，などがある。

#### ③機能別

大きく目的別に分類すれば，自動車やその他の輸送機関を渡すための「道路橋」，列車を渡すための「鉄道橋」，人を渡すための「人道橋」(九重“夢”大吊り橋はこの範疇に入る)，水道を通すための「水道橋」(今はあまり実用的では無いが，スペインのセゴヴィアにあるローマ人の建設した水道橋はあまりにも有名)などがある。

### [橋にまつわること]

橋は，その形状ゆえ，またそれが水にちなむものであることもあってか，古くから様々なジャンルの文学作品，映画などに登場し，普遍的な人気を誇っている。

#### ・昔話の中に登場する橋

「大工と鬼六」という昔話がある。あるところに，流れの激しい川があり，そこに橋を架けようとした大工がどうしても橋を完成することができない。そこで，神頼みをすると，鬼が出てきて，自分が代わりに橋を架けてみせようと約束する。しかし，そのかわりに，大工の目玉がほしいという。目玉は命なので違う条件を提示して欲しい，とたのみ大工に，では，鬼は自分の名前を当ててみるという。困り果てた大工に，山奥より鬼の名前を織り込んだ歌が聞こえ，大工は無事鬼を退散させた。という物語である。

# 吊橋

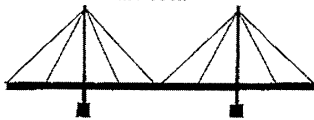
2本の塔の間にケーブルなどを張り、そこから橋桁を吊り下げる方式。古くは植物で編んだつるが用いられたが、現代では鋼鉄製のケーブルが発達し、大規模な吊橋が世界中で造られている。東京では清洲橋やレインボーブリッジなど。



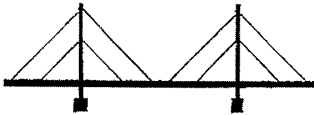
# 斜張橋

塔から斜めに張ったケーブルで桁を吊る橋梁。景観性に優れ、地域のシンボルとして近年各地に造られている。日本最大の斜張橋は広島県と愛媛県を結ぶ多々羅大橋(890m)。東京ではかつしかハープ橋や新大橋などがある。

## 放射形



## ハープ形



# アーチ橋

木材、石材、レンガ、コンクリート、鋼鉄などの材料が用いられる。日本橋は石のアーチ橋、勝岡橋や永代橋は鋼鉄製のアーチ橋。アーチの両端を桁でつないだタイド・アーチ橋をアーチに持つなど、形や工法も多様。長い歴史を持ち、古代ローマの水道橋や中国・蘇州周辺の石造アーチ橋、長崎のめがね橋など、世界的な名橋がある。

## 路面の位置による分類

### 下路式アーチ



### 中路式アーチ



### 上路式アーチ



### ローゼ橋



下路式アーチのバリエーション。アーチと桁がほぼ同じくらいの太さで支えあう。

### ニールセン・ローゼ橋



アーチ部材と橋桁の間にケーブルを斜めに張ったローゼ橋。

図版 I

# 桁橋

川などの両側に橋台を造り、その上に桁を渡す、もともと多く見られる構造。数メートル程度の橋梁から、東京湾アクアラインのような大規模な橋にまで適用できる。長くなればなるほど、橋桁だけでも相当な重さになるため、I字型や箱型など、荷重を受けてもたわみにくいような桁の形が工夫されている。

## 単純桁橋



## 連続桁橋



## ラーメン橋



上に載る部材と下の部材を一体化させた「ラーメン構造」を用いた橋。ラーメンとはドイツ語で、額縁や枠を意味する。

# トラス橋

三角形の安定性を利用した構造。単純トラス橋、連続トラス橋などの形式がある。また、アーチ橋や桁橋の一部にトラス構造が用いられることも多い。



この物語は、昔から橋をかける際よく行われた‘人柱’（ひとばしら）を連想させる。さらに、古来よりの言霊思想（名前を当てることの重要性）なども色濃く反映されていると考えられる。また、「牛若丸と弁慶」が、京都五条の橋で

あいまみえるという昔話は、あまりにも有名である。これは、架空の物語ではあるが、日本人の判官鼻貞を如実に表したものであるといえる。この話の道具立てに、橋の欄干は欠かせないものであり、材質はやはり木でないとな

らない。

・文学作品に登場する橋

山本周五郎の「さぶ」では、大川（隅田川に架かる大橋、両国橋）の場面が忘れられない。外国の作品では、映画にもなった「マディソン郡の橋」がある。ストーリーは、不倫物であるが、アメリカアイオワ州の片田舎の橋が、出会いのシーンに効果的に使われていた。

・映画に登場した橋

邦画「君の名は」はかなり古い作品である。菊田一夫のNHKラジオドラマ（この番組が始まる時間は、東京の銭湯がガラガラになったという逸話のあるほどの人気）の映画化で、空襲のさなか主人公達が偶然、数寄屋橋（今は、地名だけが残っている）で出会う、というシーンで始まる。

洋画「哀愁」（原題：Waterloo Bridge）は、「君の名は」と同様に、空襲下のウオータールー橋で出会った、英国将校と踊り子の悲劇の物語である。この橋は、現在もロンドンのテムズ川に架かっているが、1800年代にイギリス絵画の巨匠コンスタブルの描いた橋の方が美しい。ミュージカル作品として古典的名作といわれている「ロシュフォールの恋人達」というフランス映画にも、珍しい橋が登場する。一見普通の橋だが、船を通すために両方の橋脚の間の桁部分がそっくりせりあがる、という方式のもので、主人公の恋人達がそこで待ち合わせする、というシーンが印象的であった。

現在のアクション映画には、真中の持ち上がるいわゆる跳ね橋（橋桁の間の空間を車が飛び超える）が好んで使われる。また、鉄橋もこの種の映画には欠かせない存在である。

このように、文学作品や映画の中では、橋が出会いと別れの場としてたびたび登場する。一方で、橋は霊的な存在、あるいはそれが依るところとしても知られている。

・霊的な橋

この種の橋の代表格といえば、京都の「一条戻り橋」であろう。現在では、京都の隠れた名所になっている平安の陰陽博士、安倍晴明を祀った晴明神社の付近にある小さな橋である

が、大変霊的な橋として知られている。。この橋にまつわる逸話で最も有名なものは、平家物語に登場する渡辺綱が、この橋で美女に姿を変えた鬼に会う、というものであろう。また、延喜年間に、漢学者の三善だれそのの葬列がこの橋を渡る際、その息子が神に祈り、父親の命が蘇ったという逸話もある。それに、安倍晴明あやつる式神も、この橋に依っていたという言い伝えもある。これらの話は、元々、橋は異界との境をなす、という思想に源を発していると推定できる。異界との境界といえは、江戸の両国橋がまさにこれに当たる。大川を渡ればそこは、芝居小屋、見世物小屋などが林立する一大歓楽場であった。江戸っ子は、両国橋の向こう側、深川界隈を埒外の場所、一種の異界とみなしていた。昔から、芸能者のことを、「河原こじき」という言い方をするのも、このことに関連があるのではなかろうか。また、風水学説からすると、木、火、土、金、水が宇宙の5大要素である。このことから推しても、橋の材質の木と川の水の相性は良いと言える。

一方、民俗学的に見ても、橋にまつわる興味深い事象がある。

・民俗学的な事象に関連した橋

橋が完成すると、親、子、孫の三代で橋の「渡り初め」という行事をする。この場面は、古くは、両国橋の完成時の浮世絵にも見られるし、また、現在も地方では、しばしば見受けられる。これは、勿論、橋の寿命が長く続くように、という祈りを込める為の行事である。また、古くから「人柱」という悲劇もある。大阪市の淀川に架かる長柄橋（ながらばし）には、この人柱を選ぶ際の悲劇の物語が残っており、今でも、人々に語り継がれている。これは、あまりの自然の力に恐れをなし、人間の一番尊いもの‘命’を捧げ神頼みする、という風習をあらわしたものである。蛇足であるが、現在の長柄橋は、浪速の橋50選に選ばれる程の美しいアーチ橋である。橋にまつわる悲劇は、他にもある。昔の木製の橋は、強度に問題があり、しばしば崩落した、という記録がのこっている。なかでも、安政年間におこった江戸の永代橋崩

落事件は有名である。

### 〔観光資源・観光対象としての橋〕

観光学の立場からすると、観光資源とは、「観光の対象になる可能性を持っているもの（こと）＝素材」のことで、代表的なものを挙げれば、山、高原、湖、溪谷、滝、海岸、花、神社、寺、史跡、城、庭園、祭、歴史的建造物などがある。これらをさらに大きく分類すれば、自然系観光資源（山、川、滝…）、人文系観光資源（史跡、神社、仏閣、庭園…）、複合資源（歴史景観、田園風景、都市景観…）となる。

一方、観光対象とは、「人々が観光面で魅力を感じ、人々の観光行動の目的となるもの（こと）」と定義される。

観光資源は、そのままの状態では利用することが難しい状態のものが多い。神社や寺は、観光資源即観光対象の代表である。これは、神社や寺がしっかりと保全され修景、修理されているからである。

この観点から判断すれば、「橋」はまさに観光対象にあたる。しかし、前述したように「橋」の建設の目的は、本来人や運送機関（車、列車など）を通すため、あるいは水路の一部として使用するためであった。それが、橋の機能を追及し、力学的な要素を考慮していく過程でデザインが非常に洗練され美しくなり、結果として観光対象になったものが多い。

例を挙げれば、日本では、長崎市の眼鏡橋（日本の石橋のルーツと呼ばれる橋で、水面に映る橋の影と実際の橋の形状があわさって眼鏡のように見える）、京都嵐山の渡月橋（桂川に架かる橋で、よく時代劇やドラマに登場する木橋）、兵庫県と淡路島を結ぶ明石海峡大橋（1998年に開通した世界最長の吊橋で、地震の多い日本という土地柄を考慮した技術の粋が凝縮されている）、また外国では、ベネチアの大運河に架かるリアルト橋（水の都の名物石橋で、その下をガレー船が通過できるように中央がせり上がっている構造を持つもの）、サンフランシス

コのゴールデンゲートブリッジ（ケーブルカーと共に、この都市のランドマークになっている橋）、パリのセヌ川に架かるアレクサンドル三世橋（印象派の画家が好んで描いた橋）などがある。

ところが九重町の鳴子川に架けられた「九重“夢”大吊橋」は、当初から観光資源の発想で建設された珍しい橋である。この橋は、2004年に着工され、総工費およそ20億円をかけて2006年10月30日に開通した。橋を管理する責任者からの聞き取りによれば、当初この橋の来場予想は年間15万人を見込んでいたにすぎなかった。ところが、ふたを開けてみれば、2007年4月10日の時点で、来場者は早くも100万人を突破する盛況ぶりで関係者は嬉しい悲鳴をあげている。この橋を建設する、という案は昭和50年頃から町議会で取り上げられたようだが、莫大な出費が予想されたため町議全員と町民もこぞっての反対し、なかなか実現しなかったという。ところが、当時の町長が一人この建設を強硬に主張、ほとんどゴリ押しとも言えるやりかたで、建設決定をしてしまった。結果として、この強行策が、現在の大盛況をもたらしたわけである。この橋の名称中の「夢」という語に、当時の町長の思いが込められているようである。

ここで、観光学の視点から九重“夢”大吊橋の人気の秘密を検証してみよう。この橋を純然たる観光対象（当然、実用性はほとんど考えられないので）として見た場合、設置場所の選択などの要素が、いかに観光対象の特徴に合致しているかがわかる。

観光対象の特徴は、大きく以下の4つのポイントにしばられる。

1. 観光対象とは、唯一無二の存在である。

例えば、富士山のような自然系の観光対象。また、文化系の観光対象といえば、京都・奈良の社寺群、勿論大分の宇佐神宮もその一つである。これらの観光対象は、年月が経過してもその魅力があまり減少しないものである。また、近頃では、「近代産業遺産」として特徴的な工場跡や、長崎市の沖合に浮かぶ「軍艦島」（実

名：端島。石炭採掘用に労働者が移り住み、狭い島内の高層住宅に最盛期は5000人ものが暮らしたが現在は無人の廃墟となっている。近年、ここを観光対象にしようという動きがある)。

2. 「点」ばかりでなく、「線」や「面」としての観光対象もある。

観光対象は、一般に、滝や岬、神社や寺のように、ある場所に特定された「点」として存在するものが多いが、河川や海岸のように「線」としてとらえられるものもある。また、山岳や高原、湖、歴史的町並みのように「面」としての広がりを持つものもある。「線」としては、いわゆる観光ルートも考えられる。例えば、日本ならば、長野県と富山県を結ぶ「立山黒部アルペンルート」、外国でいえばドイツの「ロマンチック街道」などがそれに該当する。

3. 特定の季節に利用が限られるものがある。

観光対象の中には、祭りや花のように、その利用が特定の季節・時期に限られるものがある。例えば、春の花見、夏の海水浴、秋の紅葉狩り、冬のスキー、各種の祭など。これらの弱点といえば、その時期が限られていることである。

4. 観光対象に関する知識が旅行者にあれば、得られる効果はより大きいものとなる。

接する観光対象に関する知識があれば、そこから得られる感動など、効果はより大きく、深いものとなる。例えば、イタリアのローマであれば、誰もが一度は世界史で勉強したような有名観光対象(コロッセオ、サン・ピエトロ大聖堂、フォロ・ロマーノ、トレビの泉等)がある。

#### 【九重“夢”大吊橋の観光資源としての価値】

ここで、九重“夢”大吊橋が、いかに観光資源の特徴を兼ね備えているか見てみよう。

まず、第一の特徴「観光対象は唯一無二の存在」というものであるが、九重“夢”大吊橋は、現在のところ人道橋としては日本一の規模であるので、これに合致する。しかし、今後、これを越すもの(あるいは類似のもの)が出現すれ

ば、その価値は減少し、魅力も半減するであろう。逆に、これまでは、宮崎県綾町の照葉吊橋が日本一の規模を誇っていたが、本吊橋の完成とともにその地位を譲った。

第二の特徴「点ばかりでなく、線や面としての観光対象もある」であるが、本吊橋は、この特徴を見事に兼ね備えている。まず「点」としては、本吊橋より俯瞰できる震動の滝がある。さらに、鳴子川を遡れば、昔から渓谷美と紅葉で知られる九酔溪がある。さらに、観光資源としては忘れてならない温泉がある。古くから「九重九湯」と呼ばれている温泉地がそれにあたる。最も近いところでは、笠の口温泉、範囲を広げてみれば、龍門温泉、壁湯温泉、川底温泉、宝泉寺温泉、湯坪温泉、筋湯温泉、長者原温泉、寒の地獄温泉などが散在している。「線」を考える上で重要なのは、やはり、旅行会社の企画するツアーである。最近の傾向では、本吊橋が最高の売れ筋商品なので、旅行社がこの地域のツアーを企画する際には欠かせないものである(旅行社企画担当者のお話)という。一例として、福岡からのツアーを見てみよう。ルートとしては、福岡より九州自動車道を利用して、一気に九重インターまで来る、あるいは、一足伸ばして湯布院インターで降り、まずは湯布院を見物しそこで一泊する。その後、本吊橋を見物、さらに熊本の黒川温泉まで行く、というパターンがある。これは、福岡という大消費地を基点とする、高速道路を利用したツアーであるが、橋の完成前までは、この付近は見向きもされなかったといっても過言ではない。せいぜいのところ、紅葉の季節の九酔溪を入れ込んだいわゆる「シーズン限定ツアー」がいくらかあったくらいである。「面」としてなら、九重町全体がこれにあたる。また、さらに少し範囲を広げれば、近隣の竹田市や阿蘇地区もこの中に入ってくる。

第三の特徴は「特定の季節に利用が限られるものがある」であるが、通常この特徴は、負の要素となる場合が多い。例えば、桜の名所である長野県の高遠などは、桜の季節は、ツアーが目白押しで、大混雑であるが、その他の時期は

地味な城下町なので、多くの観光客は見込めない。一方、本吊橋の場合は、今までのところ（完成してからまだ1年半だが）、どの季節も来訪者が途絶えることがない。本吊橋の完成以前は、紅葉の名所「九酔溪」が夙に知られていた。しかし、統計によれば、この観光対象「九酔溪」も年間高々10万人程の観光客を引きつけていたに過ぎない。しかし、橋の完成後は、半年もたたずに100万人の来訪者があった。まさに、九重“夢”大吊橋の観光対象としての存在感は、カリスマ的ともいえるすごさである。

第四の特徴である「観光対象に関する知識が旅行者にあれば、得られる効果はより大きいものとなる」であるが、これは、本吊橋には、あまり的確に当てはまらない。確かに、橋から俯瞰できる震動の滝は、その歴史も古く、滝にまつわる龍の伝説などもあるが、それが観光客誘致の大きな要因であるとは言いづらい。

## おわりに

橋の語源から始めて、橋の魅力を考察してきたが、最後に九重“夢”大吊橋の問題点と今後の課題、それに大分の石橋について触れておきたい。

### [九重“夢”大吊橋の問題点]

2006年10月30日の開業以来、入場者の数は、九重町の予想を大幅に超え、2007年4月には、100万人、さらに同年9月には200万人を突破した。九重町としては、2006年度だけでも7200万円の余剰金が発生し、医療助成の対象を小中学生に拡大するという県内初の実施に踏み切った。また、2007年度の余剰金を少なくとも1億円と見込んでいるという。このことから判断すると、今のところ“夢”大吊橋の経営は順風万帆のようである。しかし、問題点がないことは無い。一つ目は、入場者の数の推移である。今までのように、5か月で100万人（一月に約20万人）の入場者のペースがいつまでも続くとは思えない。確かにリピーター（再訪者）が多い（約3割）というのは、観光対象として

は非常に素晴らしい要素である。だが、同様にリピーターの多い観光対象である東京ディズニーランドと比較してみても、本吊橋が入場者をひきつける要素は非常に少ない。東京ディズニーランドでは、季節毎にアトラクションに変化をつけ、定期的に乗り物などの入れ替えをし、さらに年間入場パスを発行したりしてリピーターの確保に努めている。

これに比べ、“夢”大吊橋は、リピーターを引きつける要素が圧倒的に少ない。今のところは、「物珍しさ」という漠然とした要素で集客ができていられるかもしれないが、時が移れば、「物珍しさ」も薄れ、飽きられてしまい、入場客の減少の恐れがある。確かに、東京ディズニーランドと“夢”大吊橋では、観光対象としての種類や規模が違う。しかし、入場者が減少する前に、今から次の手を打っておく必要がある。二つ目は、観光バス、観光客の車が引き起こす渋滞である。“夢”大吊橋の付近の道路は、元々地域住民のための生活道路であった。ところが、橋の完成とともに道路が渋滞し、地元住民に影響を及ぼすことになった。特に、週末などは、1日に1万人もの観光客が押し寄せる為、生活道路としての役目が果たせなくなっている、という困った事態が生じている。

### [大分の石橋]

九重“夢”大吊橋が、あまりにも有名になってしまったが、橋といえば、大分県内には、石造アーチ橋が多数ある。大分の石橋を研究する会の報告によれば、現存橋数は496基（全国一）、そのうち多連橋（アーチが2つ以上の橋）が51基（全国一）ある。また、橋の建設年代を見ると、江戸期～明治前期に架設されたものが50基、明治後期以降に架設されたものが446基で、明治後期以降の架設が圧倒的に多い。さらに、同会のデータから全国一を拾ってみると、耶馬溪橋のアーチ連数が8連で全国一、橋長も耶馬溪橋が全国一で116mある（平成12年のデータ）。また、野津町の「虹潤橋」は、国定重要文化財に指定されている。これらの橋の建設に携わった、豊後の石工の技術も素晴らしい

ものがある。この全国でも有数の数を誇る石橋を、大分の重要な観光対象として取りあげ、もっと有効活用できないか、というのが筆者の今後の研究テーマのひとつである。